



Title	一九世紀ウィッグの精神構造（1）
Author(s)	小川, 晃一; OGAWA, Koichi
Citation	北大法学論集, 45(1-2), 17-63
Issue Date	1994-07-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/15572
Type	departmental bulletin paper
File Information	45(1-2)_p17-63.pdf



一九世紀ウイッグの精神構造（一）

小川 晃 一

イギリスの知的雰囲気は一八四五年から二〇年間に大いに变化した。六〇年代半ばまでに新しいタイプの著書が次々と出版され、翻訳されている。異端的なシュトラウスの『イエスの生涯』がG・エリオットによって翻訳され（四六年）、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』が翻訳され（五四年）、F・W・ニューマンの『魂』（四九年）、グレッグの『キリスト教信仰』（五一年）、聖パウロの書簡についてのジョウエットとスタンレイの注釈（五五年）、バックルの『イギリス文明史』（五七―六一年）、ミルの『自由論』（五九年）と『エッセイとリヴュー』（六〇年）、スペンサーの『第一原理』（六二年）、シーリーの『エケ・ホモ』（六五年）、科学的な著作としてチャマーズの『創造の自然史の退化』（四四年）、ダーウィンの『種の起源』（五九年）などが公けにされた。これらの著作が六〇年代大学で学んだ人たちに問題を投げかけたことは否定すべくもない。

こうした有名な著作の動向から見ると、一九世紀、少なくともその半ばすぎの時代思潮において、自由思想や功利主義的傾向が支配的となったようにみえる。ダイシーも有名な『一九世紀イギリスにおける法と世論』(一九〇五年)の中で、二五年から七〇年までの時期を「ペンタム主義ないし個人主義の時代」であるとして次のようにいっている。⁽¹⁾

この時代は功利主義的改革の時代である。立法は、一般の人々により、またがいて正当にも、ペンタムの名と結びつけられた一連の見解によって支配された。ペンタムが創出者といえなくとも確実に予言者となったとはいえるその運動は、何よりも法改革のための運動である。それは英国法のすべての箇所にそのてい度は実に様々であれ影響を及ぼした。それは議会の不断の活動を刺激し、個人のエネルギーに対する制約を除去し、実際のな妨害を含んだり、あるいは何らかの仕方でも個人の自由を抑制を加えるように思われるあらゆる歴史的な異物と残存物に対し計画的な敵意をあらわにした。

六〇年代初期までにミルの影響は言論界に圧倒的だったといえる。広範に亘る彼の思想分野、論理学、形而上学、政治学、経済学は保守的伝統の濃いオックスフォードにさえその影響を及ぼしている。こうした思潮の広がり背景を見ると、世は世俗的で物質主義的となり、人々の性格も利己的で軽薄となったかのごとくみえる。そのように時代を批判し、痛罵する知識人にもこと欠かない。マシウ・アーノルドやカーライルはその典型である。

しかしながら、一九世紀半ばすぎ功利主義的傾向が支配的になったとか、さらに世は世俗的になり物質主義的になったとかと、単純にいうことはできない。ミルの影響は大学にも大きな影響を及ぼしつつあったことは確かであるが、旧大学が彼の思想に圧倒されてしまったとはいえないし、また世俗化が進んだとはいえず、宗教心がなくなつたともいえないし、国教会にさえ自由主義の影響が広がるものの、国教会が解体されることはなかった。

ミルは五九年『自由論』を公にしたし、同じ年ダーウインは『種の起源』を公にした。ミルが『自由論』を公にしたとき、それは世のマジオリティの意見の脅威、とりわけ世の道德感情を支配しがちとなっている宗教家や宗教的感情の

脅威を痛切に感じていたからに外ならなかった。『種の起源』の出版は——ダーウイン自身はそう考えなかったが——一般的に、キリスト教信仰を掘り崩すものとして、科学者と教会との間の摩擦の始まりをなすとみられた。五、六〇年代キリスト教信仰に対する知的挑戦が活発となったことは確かであるが、それを直ちに社会の世俗化とつなげてみることは危険であろう。その知的挑戦がかえって宗教的論争を活発にした面がある。タイムズ紙が「科学と宗教との戦い」を論説に掲げ論争を刺戟したのは六四年である。キリスト教信仰や教会があらさまに攻撃をうけたとき、しばしば反作用のバネが働らき、▲教会の危機▼の叫びが現われ、挑戦に対して▲潜在▼する宗教心が活発に現われる。少なくともイギリス社会において、▲世俗化▼が直線的に進んだこと(2)はない。J・S・ミル自身、イギリスにおける功利主義の位置について七〇年代初めこういつている。

あなたは、多くのフランス人と同じように、功利主義はイギリスで有力な哲学であるという意見をもっておられるように思われます。だが、功利主義は決してそのようなものではありません。人々はその学説の中にイギリス国民の精神とのある類似性を見出しているようですが、実際には功利主義はイギリスでは非常に評判が悪いし、殆ど常に悪評をうけてきたのです。イギリスの評論家は殆ど功利主義を拒否するだけではなく、それを軽蔑しています。ペンタム派は常にとるに足りない少数派とみられてきたのです。

「心に訴える宗教に対する信仰を広げようとする刺戟は、一八六〇、七〇年代においてとりわけ強力であった。それは、科学上の発見や聖書批判が大々的に報道された結果として、宗教の性質についてそれまでなかったような関心がもたれたがゆえであった。その年代、どの時代よりも、▲社交会▼と質の高い新聞が宗教上の問題にかかわった(3)のである。宗教問題が重要であったのは知識人や社交会の上層の人々のみではなく、一般の人々もそうである。教会のサーブスに出席する人の数は非常に多い。一八五一年の国勢調査によれば、一八五一年三月三十日、一日に、教会のサーブスに出席した人数は人口の六一％に当たるほどであった。一人で一日一度以上サーブスに出席する人がいるであろうから、こ

のパーセンテージほど高くはないことになろうが、それでも人口の半数ほどが、出席していたことになる。ヴィクトリア時代の宗教心の \wedge 復活 \vee が様々に説かれるゆえんである。

「勤勉な中産階級」や職人の賞賛は一九世紀、ノンコンフォォーミストと結びつけられるのが普通である。それは、大土地所有アリстокラシーの \wedge 上層一万の利己的利益 \vee 追求に基づく特権の壁に対抗せしめられ、そこには「勤勉な中産階級」の中から生まれてくる能力ありハードワーキングな個人への機会開放への要求があつた。これらの人々はしばしば狭溢な自己利益を追求し、物質財の獲得と消費を最大にする権利をもつとされるといふ。しかしこうした見解はヴィクトリア時代人の性格を著しく歪めている。当時、欲求の限りなき満足のみでなく感覚的で動物的な本能や感情を、何よりも意志の力で越えようとする \wedge 強固な性格 \vee が重んぜられた。禁酒法制定への努力はこのことをよく現わしている。謹厳(禁酒)、自助、節約、勤勉、義務感、独立などの諸徳は最も一般的なヴィクトリア朝中産階級の徳目であつた。これら徳目は小実業家によくみられた。世俗的成功は賞賛されたが、それは努力と節儉によるときであり、幸運による場合ではない。この時代盛んにつくられた友愛団体や貯蓄銀行にもこれらの徳目は現われている。しかもこれらの自発的 \parallel 自助的団体は、スマイルズのいうように、「最も高い意味で自分を援けることは隣人を援けることをも意味する」という考えを示している。これら個人的徳目の実行は、同時に社会の進歩に役立つともされた。人間の善性への確信に基づき——時たま逸脱があるもの——封建的で軍国主義的な時代は去り、個人間、及び国民間で協調の時代がこよう、と信じられたのである。このようなヴィクトリア朝中産階級——リスベクタブルな熟練労働者を含めて——のモラルはノンコンフォォーミストによく体现され、促進されたのである。グラドストンの \wedge 道德主義的 \vee 政治もこうした時代の背景なしには考えられない。

マシウ・アーノルドは、富裕な中産階級について、「つつけんどんで、絶対的で、外国のことに暗く、いく分下劣で、

こつけないことをしているときにも、それに気づかないほど鈍い」と悪罵をあげせながら、その△まじめさ▽にだけは敬意を払っている。「わが中産階級はいやしく下劣にみえるけれども、その主要な美德、まじめさをもっている。軽薄さというものが、それが洗練されたものであろうとなかろうと、それを全くもたない。まじめさ、ここに望みがある」と。ヴィクトリア時代中期はまじめさの時代であり、まじめな人間が立身出世する時代であった。イギリスの中産階級について、テーヌはこう書いている。⁽⁸⁾「彼らにとつて幸福な生活とは、夕方六時に帰宅して、愛想のよい、貞節な妻にお茶をいれてもらい、膝の上へ這いあがる四、五人の子供たちに囲まれ、うやうやしく召使にかしずかれるような風景であることが、私には容易に見てとれる」と。実際王室は国民の模範であり、それは完全なまでの性的△純潔▽と、家庭生活への全面的な献心であった。皇太子はロンドン△社交会▽に一度ならずセンセーションを巻き起したが。⁽⁹⁾

マシウ・アーノルドは十九世紀半ば、当今の貴族を一八世紀の貴族と比較し、「私的家庭的徳性、道徳や礼儀作法」の面では、「よい方向への変化」があつたことを認める。⁽¹⁰⁾ 決闘、賭、女遊びは一八世紀アリストクラシーの生活中の不可分の一部であり、決闘、賭、自殺は、ジェントルマンの三大悪徳といわれた。⁽¹¹⁾ 決闘は日常茶飯事であり、政治家の間の決闘もごく普通であつた。女遊びは三大悪徳にさえ含まれていない。一八世紀生れのジェントルマンや政治家もこれらの悪徳をうけ継ぐ。ウォルポールは晩さんの後、「猥談をしたし、チャールズ・フォックスは賭博が大好きだつたし、ピットさえ熊いじめに夢中になつたし、お祭の時焼けたコルクがぶつかつて顔を眞黒にしたし、キャニングは不まじめな詩を書いたし、メルポーンはまじめな人達の議論を聞きながら、羽毛をふつと吹きとばし、突然場違いな冗談を云つたし、ダービーは競馬場でおそろしく不まじめな振舞いをしたし、パーマーストンは演壇で肉屋を怒らせる演説をして喜んだ」。⁽¹²⁾ これら政治家は眞剣な野心をもち、執務中はけん命であつたが、解放感を欲した。国民も彼らが仕事の合間に賭事や狩猟や競馬や女遊びをするのを悪いこととはみなかつた。一八世紀と一九世紀のイギリス貴族を比べたア

ノルドも「私的家庭的徳性、道徳や礼儀作法」では粗野な所がある一八世紀貴族には、当今の貴族には失われている「公的で際立つた徳性、即ち、高邁な精神や堂々たる性格や立派な教養」があつたと、嘆いている。⁽¹³⁾ まじめなジョン・ブライト(クエーカー)は、パーマーストンのことを「年老いた山師、白髪の人」といい、「時代を動かしているが、時代及び現代のまじめさを共にしていない」という。⁽¹⁴⁾ パーマーストンは、偉人がまじめさの神殿に身を捧げる必要がなかつたともいえる一八世紀の生れ—攝政時代のだて男であつた。

女遊びは△悪徳▽でさえなかつた。選挙法改革の一貫した△闘士▽グレイ首相は、デヴォンシャー公のロンドン邸にで入りしていた若い頃、公夫人のあのジョージアナと関係をもち、子供までつくり、故郷の母親にひきとってもらつた。⁽¹⁵⁾ ジェントルマンにも女遊びは許されていた。ロンドンにはイギリス人の生活の「不潔な臀部」とテーヌが呼んだあの性的不純が存在した。ロンドンには売春婦が一万八〇〇〇人もいるともされた。⁽¹⁶⁾ まじめなグラドストンは彼女達に身を改めるよう、夜な夜な街に出て説いて廻つたのであつた。彼はウエスト・エンドに苦り切つていた。売春は広く行われ、ジェントルマン達が彼女達と遊ぶことはごく普通のことであつた。上流階級の殿方は女と遊び、情婦を囲つた。一九世紀上層階級の子弟は学問に励むようになった、とはいへ、彼らが—福音主義的活動を行つている者といへど—女遊びと馬の育種の伝統を捨て去ることはなかつた。六〇年代グラドストンのリーダーシップに抵抗したデヴォンシャー公の御曹子若きハーティントン侯、△ハーティ・ターティ▽は、ハイド・パークで馬を乗り廻している貸し馬車屋の雇われ女騎士の△じゃじゃ馬馴らし▽スキットルにいれあげ、情婦にした。二〇〇〇ポンドの終身年金を手切れ金にして分れたが。⁽¹⁷⁾ ヴィクトリア時代の上流階級の殿方はいかがわしい女と遊び、情婦を囲い、このことは、労働と自助と純潔を旨とする中産階級の人々の批判的であつた。が、それは上層階級の殿方と一しょにいる娘たちにとっては△安全弁▽であつた。ヴィクトリア時代の男性は晩婚であつたし、アリストクラットの本拠は地方にあり、ロンドンでの生活は仮の

ものであって、途方もなく貞節な妻をそこに残して、ロンドンで仮の生活をしなければならなかったのである。

だが、「まじめさが政治家に対する新しい要求項目となった」ことは否定できない。グラドストンはまじめさの典型であった。「ピールはまじめな人物である。だが、グラドストンは、自分が神に選ばれた道具であると信じた最初の首相であった」⁽¹⁸⁾。彼のまじめさには屈折と思われるところがある。しばしば「偽善」といわれるゆえんでもある。若い頃人目を魅くヴェルヴェットの派手な服装で人前に出ていた「偽悪家」のデイズレリ(一八〇四―八二)も議員になってほどなく黒っぽい身なりに変る。グラドストンや、彼のややのちの世代の政治家のまじめさには信仰に裏づけられたものがある。アリストクラシーの人達にあってはより直接的に出てくるであろう。他方、ユダヤ人のデイズレリは宗教に無感覚であったように思われる。世紀半ばすぎの政治家としてはこれが不利に働いたに違いない。

「ヴィクトリア朝の最初の三〇年間、ジェントルマン達は理想的な人間類型として、まじめで、良心的で、道徳的に無欠な性格を追い求めた。ヴィクトリア朝の最後の三〇年間、これらの徳はハイ・ソサイエティではそれほど魅力あるものではなくなったが、中産階級によって厳格に模倣されることになった」⁽¹⁹⁾のである。上層階級のイギリス人の大部分も外面的な行動パターンにおいてはこの徳目に服した。トランプでインチキをしないことは彼らの鉄則であった。名譽は何よりも守るべきものであった。世紀半ばにおける上層階級の理想的な人間類型の変化は、一八世紀や攝政時代の彼の行動様式に対する「世代の反動」でもあった。キングズレイは上層階級におけるこの「高尚な変化」が福音主義及び国教会での信仰の影響や「共通の人間らしさや正義に基づく」自由主義的原則の広まりによるとしている。

世紀半ばの最大の争点であった自由貿易の問題は五〇年代決着したといえる。対外問題を除き、世紀半ばすぎ重要な争点であった選挙法改正の問題は一応六七年の改正で決着がつく。この改正においては、自由、保守両党の立場の相違

は殆どなく、そのプロセスは著しく△テクニカル▽なものであった。⁽²⁰⁾ また、社会問題における対処においても、国家が一定の積極的役割を果してゆくという観点での△合意▽は三〇年代以後お方できたといえる。⁽²¹⁾ では、自由、保守両党の対立は全く△テクニカル▽なものとなり、原理的なものではなくなったといえるであろうか。否である。労働者の運動はチャーチズム運動の死滅とともに激しいものではなくなっていた。それでも——労働組合の組織化が進むとともに——それは重要となりつつあり、デモクラシー化への恐れも広がっていたが、選挙法改正によって一定の対処がなされたし、また政党組織のレベルで見れば、労働運動は自由党内の問題として対応ができた（△自由——労働主義▽Liberalism）。世紀半ばすぎ、最大の政治的争点となってくるのは、宗教・教会問題とこれに関係する問題である。ここに自由、保守二党の立場の原理的相違が現われる。

宗教や教会の問題が重要な政治的争点となるということは、宗教的関心がなまぬるいものではないということからすれば、ごく自然だともいえる。われわれは世紀半ばすぎにおいても、宗教への関心が薄くなり、世俗的関心が支配的になったとはいえないことをみた。しかし、宗教・教会問題が政治問題化するのはそのためばかりではない。イギリスでは国教会制が維持されており、そのことが問題を一層尖鋭化する。莫大な財産をもつ国教会の△腐敗▽という問題——これは現に△改革の時代▽の改革の対象であった⁽²²⁾——があるがそれだけではない。国教制であるがゆえに、国家や政治が直接教会の事がらに干与する（主教たちは、政府が国王の承認の下に任命するということに端的に現われる）。反対に、主教達は上院議員でもあるから、僧侶が政治に直接関与するのである（選挙法改革の時に僧侶の介入が決定的な結果をもたらしたことに、端的に現われる）。こうして政治的立場が教会Ⅱ宗教に、教会Ⅱ宗教の立場が政治に反映される。⁽²³⁾ そればかりではない。国教会に属しない強力なノンコンフォーミストの勢力が存在するのである。彼らは国教会と信仰の在り方が異なるばかりではなく、二八年審査律・自治体法が廃止されたにもかかわらず、社会的に差別をう

けている（国教会墓地での埋葬とか、旧大学への入学・学位取得とか等々）。この差別の廃止の問題はノンコンフォーム自身^{（1）}の運動として展開されるばかりか、自由、保守二党の、また国教会内での高教会派と広教会派の立場の対立をもたらす争点になる。国教徒でないにも拘らず彼らが国教会（修理など）のために納税しなければならぬという不都合^{（2）}もある。また宗教・教会問題は教育の問題と密接に関係してくる。宗教教育の必要性の問題は避けて通ることのできない事柄であり、これも政治的争点となる。大学においてもそうである。旧大学の使命は、教養を身につけさせることを別として、何よりも国教会僧侶の養成の制度であったのだ^{（24）}（世俗的専門職のための教育機関とされるのは世紀も終りに近くなった頃である）。審査律が廃止されたにもかかわらず、大学入学の際に三九ヶ信仰箇条と祈禱書の正式受諾^{（3）}が条件とされ続けたのもこのためである。

宗教・教会問題はこの時期アイルランド問題とからんで最も尖鋭な問題となる。アイルランドは圧倒的にカトリックの多い極貧地域であり、二九年カトリックは解放されたが、それでもプロテスタントの国教会制が維持され、この国教会は豊かな財産をかかえていた。またダブリンにある大学も圧倒的に優位した地位を占める豊かなプロテスタント大学であった。こうした矛盾と困難をかかえるアイルランドで、イングランドにあった宗教・教会問題と大学問題が最も尖鋭化された形で現れてくる。ここでは国教制いかに直接問題になってくる。

一九世紀半ばすぎ重要な争点となった教会問題に対処した議員や政治家たち、また彼らの重要な供給源であるアリストクラシーの精神構造をみてみよう。ここで特に着目するのはウィッグの人達である。世紀半ばのイギリスはよく功利主義の時代といわれた。半ばを過ぎれば確かに知的潮流は著しく功利主義的になったろう。とはいえウィッグやアリストクラシーがそうだったとはいえない。少なくとも功利主義と対極にある思想が彼らの思考にまじっている。パリ教授

は、一八六七年以後のウィックの△イデオロギー▽の特徴を最も強く代表する五つもの、あるいはそれぞれを典型的に表現する五組の人たちを次のように分類している。⁽²⁵⁾

①懐疑的な古いウィック心情。「多分ヴォルテールの懐疑と快樂主義、そして恐らくある物質主義的な快樂主義」の傾向をもつ△攝政時代▽のウィックの流れをひく人たち。クラレンドン（一八〇〇—七〇）が代表的、外にサマセット（一八〇四—八五）、ウエストベリ（一八〇〇—七三）。

②シャフツベリ（一八〇二—八五）によく現われているような純粋な福音主義的傾向をもつ人達。フィッツウィリアム伯（一五—〇二年）。

③カーライル型の、世俗的で頑固な悲観主義の人々。フルード（一八—九四年）、ハックスレー（二五—九五）、F・J・ステイヴン（二九—九四年）が典型。

④罪の意識を殆どもたず、伝統や美へのワーズワース的あるいはニューマン的尊厳を吹き込まれたことの殆どない寛容で楽観主義的なラティテュディナリアン。アーノルド（二二—八八年）やスタンレイ（一五—八一）。

⑤コモンマンの精神的な能力への確信に抜かれたラティテュディナリアン。ハットン（二六—九七年）が典型。ウィックはこうしたサークルの中で様々の色合いをもつて動いたという。

様々な階級の古くからのウィック、自由主義的の地方ジェントルマン、アーノルド的教育主義者、広教会派の人々、キリスト教社会主義者、アカデミックな自由主義者、理神論的知識人等⁽²⁶⁾。ウィックにもこのように様々の思想傾向があった。にも拘らず、同じバリ教授はそこに共通な信条の枠の存在を認め、それをこう要約している。⁽²⁷⁾「国の発展」は、各人が神の前で自分の義務を見定めることができるように、個々人の道徳的性格を向上させることによって促進されるという信条、「このために、ウィックは賢明で道徳的な政府による統治と、自分の利己的利益の追求に耽ろうとする人

間の欲望によつて国民の道德的水準がおちるのを防ぐ国法の有用性を弁護する」ということである。

新しいウィッグを体現する世代には、一八一五年以前に生れた先輩達と、それ以後生れた後輩達とが区別されるという。前者は功利主義の洗礼をうけながら、それに反対したり、乗りこえていった世代である。後者は前者の先達に従つた世代である。先輩の世代に属する人達としては、グレイ首相のホウィック（一八〇二—一九四、三代目伯）、オルソープ（一七八二—一八四五、三代目伯）、スプリング・ライス（初代男爵）たち、二〇、三〇年代に成年になる人達である。彼らは、世紀初め、福音主義の復活の衝激と、この衝激に刺戟されてそれに対抗しようとした国教会僧侶の努力の復活の衝激の下で、一定の宗教的ヴィジョンによつて強い影響をうけた。著作、国教会、教育問題で活躍する自由主義的国教徒²⁸とよくいわれる人々は彼らの²⁸仲間²⁸である。その中でも、トマス・アーノルド（一七九五—一八四二）とサールウォール（一七九七—一八七五）が最も有名である。こうした人達は四〇、五〇年代若きウィッグ達に多大の影響を与える。六〇年代政治的に有力になつてゆくのは後者のこの世代（後輩）である。ウィッグの主体をなしてゆくのは、この世代と、前世代の人達（クラレンドンが典型）である。パリ教授によれば、世紀半ばすぎの「ウィッグ—自由党の立場」は「大部分一八一五年から三五年の間に生れた人々によつて表現される」のである。²⁹

この世代のウィッグが若い頃、影響を受けたそうした人達には、J・S・ミルも、自分の思想と異なりはしたが、高い評価を与えている。サールウォールについての彼の評価を『自伝』の中から紹介しておく。³⁰ミルたちが二〇年代半ばからロンドンのチャンサリ通りでオーエン主義者と開いていた討論会にほどなく彼が加わつてきたのである。ミルはいふ。「私が一番感動した弁士は、その意見には殆ど一語ごと不同意であつたけれども、歴史家で、後に聖デイヴィッド教区の主教になつたサールウォールであつた。当時は大法院の弁護士で、オースティンやマコーレーの時代より前にケンブリッジ大学学友会で能弁のほまれが高かつたという以外、無名の士であつた。この男の演説は、私の演説の一つ

に答えたものであったが、彼が文章にして十ことと言わないうちに、私はこんなすばらしい演説はまだ聞いたことがないと考えた。」ミル達のこの討論会には「堂々たる顔ぶれがそろったが、その中には議員数名とならんで、ケンブリッジ大学の学友会やオックスフォード連合討論会ユニオンの最も著名な演説家達も殆ど全部入っていた。当時の傾向を奇妙に物語っているのは、われわれが会員を集めるにあたって一番大きな困難が、保守党系の弁士を十分にそろえるという点にあったことだ。むりにでも集めえたのは、質やていどの差こそあれ殆ど全部自由主義者であった⁽³¹⁾」。討論会の設置には、ミル、ロミリ、チャールズ・オースチンとともに、上述のクラレンドン伯となるジョージ・ヴィリアースや彼の弟達が当った。会に加わってきたのは、これらの人々の外、ウィック自由主義者、マコーレーや上述のホウィック卿（グレイの長男）、またブレイド、ウイルバーフォース（後にオックフォード主教）、チャールズ・トムスン（後のシドナム卿）、ブルワー兄弟、フォンブランク達である。多くの者はやめてしまいが、後、二八、二九年にはコールリッジ主義者のモリスやスターリングが加わってくる。

これは第二の自由主義系、時には急進主義系でさえある党派というべく、ペンタム派とは全然違う根柢に立つて、激しくペンタム派に反対していた。彼らによってわれわれの討論に、一八世紀の哲学に対するヨーロッパでの反動の原理や考え方が持ちこまれ、したがって第三の非常に重要な戦闘的党派を加えたことで、われらの論戦は今や新しい世代の最も教養ある人々たちの中の思想の動きを相当忠実に代表するものとなった。⁽³²⁾

ミル自身二〇年代後半、育てられたペンタム主義の原理に懐疑的になり、一八世紀合理主義に対抗して生れつつある思想の潮流のインパクトをうける。

二〇年代知的環境に変化が起りつつあった。変化は学校にも現われる。世紀初めの大学の知的雰囲気にはまだ啓蒙主義的であり、功利主義的なものがあつた。少なくともケンブリッジではそうである。ここではペイリーの『道徳及び政

治哲学の原理』(二七八五)が長く道徳哲学の教科書として使われていた。「ベントムが世に知られる前に、もう一人の功利主義哲学者が名声をえた。それはペイリー「僧侶」である⁽³³⁾。彼は道徳哲学の中に幸福功利の概念をひき入れたのであり、これが、予期せぬことながら、学生にベントムの教義への共感と理解を準備したのである。二〇年代チャールズ・オースティン、チャールズ・ブラー、その外活動的な若者達は学生の間に活発なベントム主義グループを形成した。オースティンは学友会^{ユニオン}で指導的な役割さえ果たしていた。ドンたちがこの傾向を憂え、ロックの『人間悟性論』とペイリーの『原理』を有害とみ、これに反論を加えるようになったことにはこうした背景があつた。功利主義的潮流は制度的にも具体化される。それはゴア街のロンドン大学の創立である。この大学の創立の着想は、一八二〇年T・キャンベルがドイツのボンの教授達と討論した際に生れ、大学は、ドイツの大学を範とし、これをベントム主義者、ウィッグの者、デイセンターが支持することによってつくられた。彼らがつくろうとした大学は、宗教教育がなく、より現代的な教育に力を注ぎ、旧大学よりも安あがりであり、中産階級の子弟を対象とする高等教育の場であつた。二五年に大学の具体的なプランが提示され、それは——旧大学のように、学寮制やチュートリアル制に力点をおかず——教授制を原理とし、宗教教育も共通の礼拝も全く行わず、いかんともなし難い宗派的対立を避けることとし、かつ組織は株式会社によるとした。大学は、当初、学位を与える権利までは求めないが、自治組織として公認されるよう求めた(これも当初トリー政府に拒否される⁽³⁴⁾)。

大学におけるこうした功利主義的傾向に対し、反対が起る。ケンブリッジでは反論はまず地質学教授セジウィック、次いでより有能で活気あるヒューウェル教授によってなされた(当時道徳哲学教授のポストは有給閑職となつていた)。セジウィックの立場は先天的な道徳感に立つものであつた⁽³⁵⁾。この頃は知的雰囲気は変つてくる。二〇年代ワーズワースやコールリッジ、あるいはドイツ神学が読まれ始め、福音主義の復活によって精神的熱情が鼓吹されたのである。この

変化はケンブリッジの《最良》のコレッジ——世紀代り目から一九世紀にかけあまたの人材を送り出した——トリニティ・コレッジの中に現われている。⁽³⁶⁾三〇年頃学寮長ワーズワースに招かれた卒業生たちの集りでなされた会話の記録は変化をよく示してくれる。⁽³⁷⁾この集りで功利主義者は嫌悪の念をもって語られ、功利主義に反対している人達、セジウィック、ヒューウェル、ヘアの教えの方に称賛が向けられている。会話に加わった人達によれば、二〇年代末ケンブリッジで反功利主義はフアッションになったという。F・D・モリスによれば、彼が二五年入学した時「若々しい賢い学生の間——特にトリニティではペンタム主義が広まっていた。……私が属したある小さな会で、私は功利主義の教説に対してコールリッジやワーズワースを弁護せねばならなかった。」⁽³⁸⁾ところが程なくペンタム主義優位の雰囲気が変わるのである。J・S・ミルと対立する立場であったが、親友でもあったコールリッジ主義者のスターリングもこの変化の促進者であった。功利主義の環境の下で教育されたミル自身、二〇年代の後半「精神の危機」に見舞われ、ワーズワースやコールリッジにひかれた。⁽³⁹⁾三〇年代末には彼はペンタムと並んでコールリッジをイギリス思想の二本の支柱であるとまで評価する。⁽⁴⁰⁾

二〇年代既にコールリッジ、ドイツ神学、復活した福音主義の情熱は神学的自由主義の上にも大きな影響を与えていた。ここからくる思想、即ち、有機的な国民的統一、再生した伝導団により鼓舞される国民的教会、国民の教化にたずさわる知識人インテリゲンチヤ(コールリッジ)という観念は自由主義的な人々の心を強く動かしていた。「このプロセスにおいて、また他の知的潮流に対する反作用において、これら神学的自由主義の観念は微妙に異なる多様な形態をとる。これらの観念を広め、それらを再構築するのに最も責任ある二人の人物は、相互に極めて異なり、政治的には極めて異なる仕方での大きな影響を与える人物、トマス・アーノルドとトマス・カーライルであった」⁽⁴¹⁾。アーノルドはトリリーの痛烈な批判者であり、カーライルはどちらかといえはトリリーであり、二人の立場は相違したが、二人の影響は絶大であった。こ

のことはアーノルドが反対するニューマンについてもいえ、オックスフォード運動が若い世代に及ぼした影響は一見したよりもはるかに根深い。

貴族の子弟は一八世紀中しだいに学校での教育を重視するようになった。別の機会で述べたように、彼らは——とりわけ政治家になるために——パーブリック校に送られ、また大学で学ぶようになった。一九世紀のパーブリック校についていえば、トマス・アーノルド博士によってなされたラグビー校の改革、及びこの学校が果たした大きな役割はあまりにも有名であり、今さら述べるまでもない。彼は二八年から、オックスフォードに移る頃の四二年までラグビー校の権威ある校長であった。彼はパーブリック校の偉大なる改革者であり、改革の精神は聖書の中にあるのであった。アーノルド博士の改革の大きな柱は、一つは古典教育の在り方、また一つは生徒の間の監督生制度の改革にあったが、それ以上にさえ重要であった柱は宗教・道徳教育の強化であった。これは当時までのパーブリック校をみればよい。例えばキーツ在学中の一〇年代のイートン校との相違は著しい。「宗教教育はゼロに等しくなっていた。ヘンリー六世の古く敬虔な莊嚴さは公的な英国教会の上塗りによって様変りした本質的に異教以外の何ものでもない⁽⁴³⁾」。二〇年代前半イートン校に入ったグラドストーンは、四〇年後に回顧しつつ、「キリスト教の教えそのものは死んだも同然であった。幸福にもその形式はいささかも崩されていなかった⁽⁴⁴⁾」。アーノルドはラグビーを「眞のキリスト教教育の場」にしたかったのであり、チャペルの説教は週の道徳的宗教的教育の絶頂となった。監督生制度はこの教育の手段ともされるようになった。

アーノルド博士は改革の精神を聖書の中に見出す。だが、それは「伝統によって理解される聖書ではなくて、学問、研究、特に政治的洞察を通じて理解された聖書⁽⁴⁵⁾」の中にある。教えられる教課は科学よりは、ギリシア・ラテンの古典である。「アリストテレス、プラトン、ツキジデス、キケロ、タキトスを昔の著作家とみるのは全くのまちがいであり、

彼らは実際に我らの同胞であり、同時代人なのだ⁽⁴⁷⁾。古代の著作家は現代文明の一時代に相当する著作家であり、古代ギリシア・ローマは一九世紀の人間によって、政治問題を解決するための、あるいは政治問題を自由にかつ雄弁にかつ底深く論ずる際の眞に有益な実例となるものとされた。「キリスト教徒であり英国人たる者が学ぶ必要のある学問は、キリスト教、道徳、政治哲学のみ」⁽⁴⁸⁾（アーノルド博士）であり、博士はキリスト教を柱にしつつも、ギリシア・ローマ思想、とりわけその国家思想がイギリスの直面する社会の問題に重要な関係があると考え、ギリシア・ローマの著作と歴史の勉強を課したのである。

キリスト教とギリシア・ローマ思想との博士の二本柱は息子のマシウにもうけ継がれる。彼は有名な著作『教養と無秩序』の中で、これをヘブライ主義とギリシア主義として論ずる（特に第四章「ヘブライ主義とギリシア主義」）。彼によれば、ギリシア主義とは、ものを在るがままにその眞実の姿でとらえること（「その最高の観念は事物を如実にみること」）であり、ヘブライ主義とは——神の教えに従い正しく——行為すること（「その最高の観念は行為と服従である」）。さらに具体的にいえば、⁽⁴⁹⁾ギリシア主義は明瞭に考えること、事物をそれらの本質と美においてみることが人間がなしとげるべき雄大で貴い業績であると語る。他方ヘブライ主義は、罪を意識すること、罪の意識に目ざめることがこの種の所業である。「行為の中で人間の努力への妨げが罪の意識となり、ここから神への目が開かれる」ギリシア主義とヘブライ主義は一見全く別のように思われるが、「人間の知的衝動と道徳的衝動、事物を如実にみようとす努力と、自己克服によって平和をえようとする努力であり」、人間精神は柔軟なこの相互浸透によって完成に向って進んでゆき、共に「目標とし目的とするところは一つである。人間精神が向うべきなのは「全人格の円満な完成」、即ち「教養」である。中産階級のノンコンフォーミストはヘブライ主義に傾きすぎ、ギリシア主義の「優美と慧知」に著しく欠け、「教養」を欠く「俗物」（後述）、他方貴族階級はヘブライ主義的宗教・道徳心を欠く「野蛮人」であり、何れも教養に

おいて不完全であり、人格の完成からは遠い。⁽⁵⁰⁾

アーノルド博士は三三年『教会改革原理』を公にした。その結論は一八世紀のラティテュデイナリアン（一八世紀の低教会派）のものに近い。核心はデイセントを包み込めるような論理にある。国教会は急進派とデイセントとの同盟によつて脅かされているが、国教会は国民の健全な生活のためには必要なものである。したがつてデイセントが国教会に入れるようにし、その基盤をできるだけ広げねばならない。そのためには意見と礼拝形式の多様性が認められねばならない。教義は妥協的にし、本質的とするものをできるだけ少数にせねばならないし、それも現にできる。神への信仰、救世主としてのキリストへの信仰、聖書が人間に向けられた神の意図を含むとの信仰、正と邪の観念の信仰、である。日曜の午前中の礼拝は正式のものでなければならないが、その外の礼拝は自由な形式のものであつてよい。カトリックとユニテリアンとクエーカーについては国教会の外にいることを認める。司教区を増やし、大都市には総て主教をおき、各主教は俗人をも交えた会議を開くべきである、と。

アーノルド博士がイギリスの宗教・教会、思想・思潮・学校（パーブリック校や旧大学）、その外もろもろの側面において及ぼした影響は計り知れないほど大きい。それは彼自身の思想や行動によつてのみでなく、弟子たちや、団結の堅いラグビー校卒業生を通じてであつた。そしてその影響は一定の自由主義的な方向へのものであつた。弟子たちにはすぐれた人達が多く、彼ら自身思想家であり教育者であり、彼らは師の思想を發展させ、広めた。彼に最も近い弟子は A・P・スタンレイ（一五一八一年）であり、ラグビー校卒業ののちペリオール・コレッジに入り、オックスフォード自由主義者のうち最も目立つ存在となつた。驚異的な成功を取めた著書『アーノルドの生涯』（四四年）は、その『英雄』を今は世を去つたが、なお力強く語りかけている予言者として描いている。事実、四二年での死去後も博士はオックスフォード内で、保守主義者に挑戦している自由主義陣営での導きの星であつた。スタンレイはユニヴァシティ・コレッ

ジのフェロウとなり、オックスフォード自由主義のために多大の盡力をなした。⁽⁵¹⁾ A・C・テイト(二一—八二年)とF・テンブル(二一—九〇二年)、何れもラグビーペリオールの出身である。前者はペリオールのチューターの時、ニューマンの小論XC号攻撃の先陣を張り、やがてラグビー校に移って博士のあとを継ぎ、後者は四九年テイトのあとを継いでラグビー校に移った。何れもカンタベリー大主教となった。W・C・レイク(三四年ペリオールへ)はペリオールのチューターに、A・H・クロウ(三六年ペリオールへ)はオリオールのチューターになり、ラグビー精神を発酵させ、ラグビー校に劣らないほどその精神をオックスフォードに広げた。R・コングリーヴ(三七年ウオダムへ)も「宗教原理での偉大なアーノルド主義者」であった。

これらラグビー校出身者の影響は絶大であった。ラグビー校の在り方は彼らによつて他の学校に広げられる。ハーロウ、モールバラ、ブレアトン、クリフトン、ヘイリベリ、チェルトナムなどのパブリック校はそうしたものの典型である。ラグビー校の卒業生のまともりは固く、彼らは卒業後もよく母校にきた。校長となつたテイトの下のラグビー校は卒業生のみではなく、オックスフォード、特にペリオールの「植民地」になつたほどである。⁽⁵²⁾ 卒業生や彼らの友人たちは、ここに来て、学校や大学の問題、それに世界の問題についてまで論じた。卒業生には、政界はじめ、教会、学会、法曹界、軍人、実業界など多くの分野で活動的な者が多く、政治家になつた者には自由主義者が多い。急進主義者やキリスト教社会主義者(フレイザー主教やトム・ヒューズ)さえおり、彼らは「階級と大衆」とをつなげる橋ともなつた。ラグビー校は自由主義の温床であり、また神殿であつた。

二〇年代において既に政治は新しい方向に動き、三〇年代、政治は「改革の時代」に入る。⁽⁵³⁾ 思想の新しい潮流も始まつていた。とはいへ、それは全くのマイノリティであつた。国教会や旧大学、特にオックスフォード大学は著しく保守

的であった。

主教達をみるとこのことはすぐわかる。三一年秋下院を通過した改正選挙法案は上院で審議され、採決がなされ、四一票差で否決されてしまった際(一〇月八日)、主教達は圧倒的に否決の側に廻ったのである。支持は二名のみであり、大主教一名(ヨーク大主教は欠席)と二〇名の主教は反対し、他の六名は何らかの理由で欠席した(ロンドン主教ブルムフィールドは父の死で欠席)。「大部分の者は特に教会の秩序を守ろうとしたのではなく、国家の、したがってまた教会の古き憲法をば、法によって確立されたものとして守ろうとした」⁽⁵⁵⁾のである。彼らが特に恐れたのは、ディセンターが選挙権をうることによって非国教化が進められるのではないかと、とりわけカトリック教徒が圧倒的に多いアイルランドで政治権力がカトリックに移り——カトリック解放の時にはおかれた歯止めがはずされてしまい——アイルランド教会が非国教化されてしまうのではないかということであった。グレイ内閣はこうした上院での審議の結果を予測しえなかった。民衆は、法案否決後、上院議員、特に主教達への攻撃に激しさを加える。新聞では、国教会の富と壮麗さが使徒達の質素さや素朴さと比べられ、上院から主教の席をとり去り、彼らに政治に関与させず、ひたすら僧としての勤めに身をいれるようにさせるべきだとされた。国王やグレイ首相達が彼らを説得し、このため翌年四月の第二議會では一二名の主教が法案支持にまわるようになった。それでも五月トリー側から修正案が出された時、三名の大主教と一三名の主教がこれを支持したのである。

国教会は既に様々の観点から批判されており、その \blacktriangleleft 腐敗 \blacktriangleright は仮借なく指摘されていた。J・ウエードは二〇年代早々これをとりあげ、三一年に『特別ブラック・ブック』としてまとめて出版し、三五年までに五万部も売れたほどである。⁽⁵⁶⁾ここに指摘されている腐敗の例は誇張されたものであるとはいえ、改革さるべき腐敗が種々あることは明らかであった。あのイギリス的な保守主義によって、国教会は教義と礼拝形式を変えつつ宗教改革を行ってきたが、その法的枠組はな

お中世的なものであった。教区牧師職の自由保有権、教会裁判、有給閑職、シホキョウ聖職欠員時の教区聖職録の一時保有、兼職、信者が殆どいないにも拘らずふんだんの祿のある教区、僧職任命権の売買、教会のポケット・バラなどの問題であった。選挙法の改革が行われつつある時にも教会改革の声が叫ばれるようになり、改革される議会は大規模な教会改革を行わねばならず、教会贈与、兼職、任地不居住、主教職、政治的教区牧師の問題は存分に改革されねばならないとされた。こうしてグレイ首相は選挙法改革案の成立直後直ちに国教会収入検討委員会をつくり、改革につながる教会収入の現状の調査を始めさせる。(37)改革は教会内部から進めらるべきだとする彼は、委員の多くを教会人から選び、また委員会の結論をあえて忙がせなかった。新選挙法下での最初の選挙でも教会改革問題は最も尖鋭な争点といえるほどになった。委員会での検討は内閣の交代にもかかわらず続けられ、メルボーン・ウイック内閣でいくつか実現される。

二八年の審査律・自治体法の廃止、それから選挙法の改革と、デイセンターは活発に動いた。三三年にはプレスピタリアン、会衆派、バプティスト三派の代議員は連合委員会を作り、「現在デイセンターが矯そうと努力している不満を考察」し、五月委員会は五つの不満項目を特定し、政府に提出した。(38)

- 一、教会と国家の完全な分離。
- 二、主教に上院内の席を与えるチャールズ二世の法の撤廃。
- 三、財政的支持のために金銭を徴収する強制的権限をあらゆる教会に与える法すべての撤廃。
- 四、大学改革、宗教審査全廃、大学での平等な権利。
- 五、結婚や公的埋葬に関し、登録の平等な権利のための法の改正。

他方、トーリーの牧師はデイセンターの行き方に激し、**教会の危機**を叫び、国教会を護持しようとする。「高教会派の人という言葉が英国教会に組する強硬派を意味する限り、一八三〇年から三四年までの僧侶はますます強硬とな」

り、並の人達とはコミュニケーションができないほどとなった。「一八三四年の初めの数カ月、教会とデイセンターの裂け目は英国史上かつて例がないほど深刻となった」⁽⁵⁹⁾。高教会主義への揺れはニューマン達のオックスフォード運動の形成(三三年夏)に典型的に現われる。オックスフォードはそもそも高教会とトーリーの牙城であったのだった。

旧大学は保守的であった。全国政治についての立場が保守的であったばかりか、大学の諸制度においても保守的であり、与えられ、維持されてきた特権と寄付財産を頑固に守りとおしてきた。ホジスキンはこういつている。⁽⁶¹⁾

われわれはわが旧き大学をばわが憲法の構成要素とみており、それを修正したり、こわしたりすることは聖所の冒瀆にも等しいとすることに慣れているけれども、大学のうき沈みは、創設者の生命ほどの短さであり、まことに不思議に思われる。変化のたやすさは制度が君主の意志の単なる泡沫であるということからくる。……したがってドイツの大学はイギリスの大学と本質的に異なる。イギリスの大学は自からの法によって規制され、膨大な財産をもち、国の法以外のいかなるものからも独立した団体である。社会の教育に対する主権者のコントロールを悪と考えるあの哲学は、こうした状態にあるドイツの大学制度をまことに残念なことがらとみている。しかしながら生ける人間が変えうる大学は、世紀から世紀へと眠り込み、あらゆる所で起っている改善に全く注目しない大学よりはよい。……ヨーロッパ中どこにも、イギリスにおけるほど膨大な基金が大学教育のために用いられているところはまずないし、ゴチック的な規制にしがみついているおかげで、これだけの基金をもちながら成果をあげていないところはどこにもない。

旧大学は公認された特権を排他的に維持しようとし、ロンドン大学が政府から自治組織の公認をうけ、また学位授与権の認可をうけようとした時、これを妨げるべく動いた。⁽⁶²⁾改革の時代旧大学も批判をうける。前述の『ブラック・リスト』の批判もあったが、より筋の通ったものは、大学の行政組織についての批判を別にし、一つは、デイセンターの入学や学位授与の問題、もう一つは、コレッジ学寮とチュートリアル個人指導制による大ユニヴァーシティ学と教プロフェッサー授レクチャーの「63纂奪」、いわば「64私的施設」による正式の施設の制度の「63纂奪」である。ミルも学寮制に批判を加えている。旧大学における学問・研究の衰微はよ

くこうした篡奪によるともされた。専門（職）教育も、僧職を除き、殆ど行われなくなっており、僧職教育さえ十分ではないと批判されていたのである。旧大学の保守性は国のレベルでの保守性以上であり、これはデイセンターの扱いをみればよくわかる。国のレベルでは二八年審査律・自治法が廃止され、デイセンターの地位は改善されたが、旧大学では依然として差別が維持された。また、カトリック解放を成就させたオックスフォード大学選出議員でもあったピールは大学で手ひどい扱いをうけた。特にオックスフォードは保守的であった。ケンブリッジでもデイセンターは学位をとることはできなかったが、入学は、——国教徒としての——**△宣言▽**をするだけでよく、三九ヶ信仰簡条と祈禱書の正式受諾（サプスクリプション）をする必要がなく、比較的容易にできた。他方オックスフォードでは、正式受諾は必須であり、学位取得はおろか、入学もできなかった。そのためケンブリッジは、オックスフォードに入れない**△懷疑主義者▽**総てをうけられることになったという。⁽⁶⁶⁾三〇年代のイギリスの改革期、大学の改革も叫ばれるようになり、正式受諾をケンブリッジ並の**△宣言▽**に代えようとの動きもあったが、それも実らなかった。主教職に空席ができた時、政府はオックスフォードとケンブリッジからかわるがわる選ぶという慣習があり、三〇年代ウィッグが政府を荷うようになったとき、首相メルボーンはこの慣習を破るまいとしたが、それができなかった。「オックスフォードにはあまりにも自由主義の適任者が少なく、この大学のメンバーから主教を選ぶのがむずかしかった」からであった。⁽⁶⁸⁾このためヨーク大主教はメルボーン首相が大部分の主教をケンブリッジの間人から選んでいるとして、彼を批判したことがあるほどである。メルボーンは、ケンブリッジが一〇名有名な人間を生むとすれば、オックスフォードは五名しか生まないとし、大主教に向い、交互の任命という古くからのルールは悪しく不合理である、それによれば首相は劣った人物しか任命できないことになる、明言した。事実彼の任命はオックスフォードの四名に対し、ケンブリッジの九名であった。⁽⁶⁹⁾オックスフォード運動はオックスフォードのこうした保守的土壤から生れ、一時的だがその色合いをさらに強めたのである。それだけに、オ

ックスフォードでは、自由主義的勢力が増し、大学改革が問題となったとき、主流の保守派との抗争は熾烈となった。ケンブリッジはより静かであった。⁽⁷⁰⁾

とはいえ、旧大学何れも世紀半ばまでは著しく古い制度を依然として維持していた。チャペルへの強制的な出席、フェロウの独身制と、僧職に就く義務(世俗的な専門研究のポストはコレッジの中にはない)、三九カ条の正式受諾や宣言。またカリキュラムの性格と内容(大学公認のものか、それともチュートリアル制の形式のものでよいか、公認の場合の内容は)。さらに、大学は本来的に「ジェントルマン」教育の場であり、研究の場ではないという観念や制度(教授制や講義制の軽視、古典文学科以外のものの比重の軽さ)。これらはやがて問題にされ検討されざるをえない。

主としてウィッグ政府により国のレベルで自由主義的改革が進められていたにも拘らず、オックスフォードは、まさにそれゆえに、保守性を強化したように思われる。ピールがカトリック解放にふみ切った二九年初め、オックスフォードに議員辞退を申しいで、補欠選挙が行われた。ピールの再選を推す側には、それまでピールを選んできた有力者とともに、オリオールの学寮長ホーキンスやセント・オルバンズの学寮長ウエトレー達、自由主義的な人々が加わった。対抗したのは、サー・H・イングリス(東インド会社重役)の息子でウルトラ高教会派のイングリスであった。大学の有名人は圧倒的にピールの側であったにも拘らず、勝利を収めたのはイングリスであった⁽⁷¹⁾。「保守党政府、ウィッグ、急進派の一致した努力」にも拘わらずであった。オックスフォードの大勢がいかに保守的であったかがわかる。学長グレンヴィルが死去した後、三四年学長に選ばれたのは、三〇年に選挙法改正反対を断言したため政権を潰し、改正過程でも再三グレイ内閣を苦しめたあのウエリントン元首相であった。⁽⁷²⁾学長就任式にはトリーの貴族達はアスコート(競馬)にも行かず、歓呼のうちに参列したという。ウエリントンはデイセンターの入学に反対し、またロンドン大学に反対するキャンペーンを強力に指導することを約束した。とはいえオックスフォードにも改革の兆しが現

われる。ウエリントンは△ウルトラ▽ではあったが、カトリック解放問題にみられるように、リアリスティックな適応の心構えをもち、大学の超保守的なドン達に対し、「普通の人間として」世間の空気を伝えるという役割をも演じようとした。⁽⁷⁵⁾三三年から三四年にかけてディセンターの運動が昂揚し、請願運動が活発となる中で、新学長は正式受諾の制度でケンブリッジとの相違があることを問題とし、ケンブリッジ並にするよう意見を述べた。余りにも古くさく時代にそぐわないような慣行や制度はなおしてゆくべきだとし、大学制度の検討を議会でとり上げたいとさえした。⁽⁷⁶⁾三三年一月には、ウィックグのある学寮長が正式受諾に加え、反対のより少ない何らかのテストを採用するよう学寮長会議に提案した。提案に反対の一四名に対し、賛成は七名にもなった。⁽⁷⁷⁾ディセンターの入学には反対であっても、正式受諾の制度の緩和を支持する者は少なからずいたことになろう（若い層はいつものように！強い緩和反対の態度であったが）。アーノルド博士のラグビー校は三三年、ディセンターを国教会に含める案を出していたが、翌年彼は彼らを大学にも入学させるべきだという案を公にした。⁽⁷⁹⁾

しかしオックスフォードの保守性は、ウィックグが政権をとって改革を強化し、その波が国教会と大学に及んでくると、それへの反動として一ときさらに強化される。オックスフォード運動がその典型的な現われである。運動を起した人達は、彼らのいう△国教会の危機▽に直面して高教会主義をざりざりまで——やがて儀式主義にまで——強化するのである。当初の三三年彼ら（キーブル、ニューマン、フルード、バーマー達）⁽⁸⁰⁾は次のような基本原則を掲げた。⁽⁸¹⁾

(一)使徒伝承の教説の堅持。宗教改革の意味が問われるのもこのためである。極端な者（フルード）は宗教改革を否定さえる。⁽⁸²⁾ニューマンも国教会を△プロテスタント▽とはいわなかったし、やがて——ピュゼイ達と違い——宗教改革が教会を改悪したとして、それを貶しめる意見を明らかにした。宗教改革が教会自身の手によってでなく、国王により押しつけられたという国家至上主義^{エッフェンタニニズム}に対する批判もある。彼らが教会の権威を高くみるからである。

(二) 国教会の成員でない者に意図的に靈的事項に関与させることは罪であるとする事。

(三) 国教会をより民衆的なものにするのが望ましいこと。

(四) 非国教化の可能性をも熟慮し、それに準備しながらも、教会を国家から分離しようとする試みには抗議してゆくこと。

三三年秋に始められた彼らの小論文の公刊は、年の終りまでに二〇に、翌三四年の終りまでに五〇に、三五年七月までに六六に達した。三六年欽定神学講座教授バートンが死去し、後継者としてメルボーン首相が教会問題での彼のアドバイサーであるダブリン大主教ウエトレーの奨めにより——国王の承認をえて——セント・メアリ・ホールのハンブデン学寮長を指名した時、⁽⁸⁴⁾ ニューマン達の反対運動は著しく盛り上がった。⁽⁸⁵⁾ ハンプデンは三九カ条の公式受諾の制度を単なる宣言に代えようとした博士である。ハンプデンは結局就任するが、オックスフォード運動が絶頂に達するのはこの頃である。若者たちはニューマンの呪縛にかかった。「学生は彼が年長者の間で評判が悪いがゆえに、彼の名が刺激であるゆえに、彼が欽定講座担当教授を打のめすがゆえに、彼の所にまず行き」、自分達にふ慣れな吟味をするよう導く論理的な力に遭い、師を尊敬した。⁽⁸⁶⁾ セント・メアリ（大学関係者がよく行く教会）に行き、この上なく美しい言葉で説かれる彼の説教によって学生は服従、清浄、捧身、聖礼典、精進苦行を学ぶ。ウエトレー大主教によれば、三八年一〇月勉学に励む学生の三分の二はピュゼイ主義者だといふ。⁽⁸⁷⁾ この数字はともかく、三七年ニューマンを追う者の数は大学史上稀にみるほどのものになった。学生達は彼の説教をきき、彼の仕ぐささえた。三七年学寮のあるフェロウ達は訪問者に、ピュゼイとニューマンがオックスフォードを支配しており、彼らに抵抗しうる者は誰もいず、大学の精神の帝国に対するニューマンの勝利は完璧であるといっている。⁽⁸⁸⁾ 彼の影響が最も広がった時である。⁽⁸⁹⁾ グラドストーンが宗教的立場を最初に明らかにした有名な著書『教会との関係における国家』（三七年）を公にしたのもこの頃である。三二年以後の六年間に彼はもともとの福音主義の立場に、さらに、オックスフォード運動の影響をうけて、英国教会が

歴史的な普遍教会の一分岐であり、自身の教義と組織をもつ——△国家から▽——独立した結社であるという見解を加えたのである（彼は数年にしてこの立場も離れる⁽⁹⁰⁾）。

オックスフォード運動ほどはなかつたが、ケンブリッジにも同じような動きがあつた。『使徒』(Apostles)や『教会学者』(Ecclesiologists)の運動がそうであり、四〇年代大学は宗教論争の温床となつた。後者は教会の記録を掘り起し、中世の忘れられた礼拝をよみがえらせ、高教会の正しい礼拝形式なるものに関心を抱いたし、前者は同じく高教会への捧身において一途であり、新たな騎士道崇拜に心を寄せて大学を出た。ラトランド公の息子ジョン・マナーズ卿がそうであり、彼はほどなく『青年英国党』の一員としてデイズレリーに従つて行動することになる。

ハンペン問題が尖鋭化した時、ラクビー校のアーノルド博士はエディンバラ評論に「オックスフォードの悪意ある人達」(三六年)を書いてこれに介入した。彼はそこでニューマン達を陰謀、狂信、邪悪、腐つた良心をもつ人々といつて極端な高教会派を痛罵したのである。彼はウエトレーとともに、「力強さと大胆さとで衆目を集めており、国教会の性格、構造、機能についての理論を既に発展させていた」のであり、教会についてのニューマン達の思想が着目され始めたとき、これに対抗して△伝来の▽教会理論を護ろうとした。「オックスフォード運動の端初をなす異なつた一連の思想——真面目で熱心な人々にはこの思想によつてしか国教会は維持⁽⁹¹⁾できないと思われた——がアーノルド博士の道を遮つた時、彼はこれと戦おうとしたのである。博士はウィックにとり——ハンペン以上に——貴重な人物であつた。それだけに、彼を重要なポストに就けようとすれば、高教会派から非正統的な人物として攻撃をうけるに相違なく、ましてハンペン問題で敏感になつていた国教会や旧大学の空気の中ではように受けいられるはずもなかつた。トリーリーの新聞は博士の「悪意のある人達」をとりあげて攻撃し始めていた。首相のメルボーンは面倒を起したくはなかつた。やがては彼は博士もオックスフォードの欽定講座教授に推すようになる。が、それは混乱を起す可能性の

ある神学教授のポストではなくて、近代史講座のポストであった。それも政権の終りが近づいているとみた四一年にあってからであった。混乱が起つても痛くはないと考えたのである。⁽⁹²⁾アーノルド博士はそれまではオックスフォードから離れたラグビーにいた。オックスフォードの教授になったが、ほどなくの翌年の四二年死去してしまう。彼の死はオックスフォード自由主義には大きな痛手であった。だが彼の教えは弟子や卒業生、さらに彼らの友人達によって広げられるのである。

四〇年代初めはオックスフォード内での各派、各層の争いが泥沼化した時である。まさにこの時ニューマン達(ΛトラクタリアンV)が発行している『時代のための小論文』の「第九〇号」、ニューマン自身が書いたこの号が大きな問題をひき起したのである。彼はここで、総ての国教会僧侶が正式受諾をしている三九カ条が伝統的カトリック信仰に反しないことを論証しようとした。ここからすると、カトリックも国教会に入れることになる。これは正統的な立場に相い反する。しかも論証は牽強附会であった。(しかも三九カ条はより完璧なものとするために手を加えられなければならないともされた)⁽⁹³⁾。学寮長達は九〇号に対し極めて強く反発する。この号そのものの糾弾は控えたが、『小論文』刊行の続行自体を禁じてしまった。ニューマンが近辺の村に自から作った礼拝堂に引込み(四二年)、さしもの運動も下り坂となる。しかし抗争は続く。詩学教授キープルの後任問題で大学はもめた(四二年)。票数計算で、対立候補への支持は九二一で多数を占めたが、トラクタリアン側の候補もなお六二三もあるとみられた。⁽⁹⁴⁾四三年にはピュゼイが異端の弾劾をうけ、二年間大学内での説教を禁ぜられた。ニューマンは四三年秋セント・メアリ教会で最後の説教を行い、四五年に正式にカトリックに改宗する。こうして一〇年以上に亘って続いたオックフォード運動は——消え去ることはなかったが——下火となった。

九〇号をめぐるオックスフォード大学当局の処置はトラクタリアン派に対する大学当局の戦いの宣言であった。疑惑、気づかい、反感、

羨望といった権力の側にある人達の中にくすぶっていたものが最後に固まり一定の行動となつて現われた。それは運動の歴史での転換点であつた。これ以後運動はそれまでのものとは同じものではなくなる。それはその限りで英国教会内での、現にその昂揚と改革のための運動ではあるが総ての段階で深い尊敬の念をもつて權威を呼び求め、無条件的であり過度でさえある条件での支配者への服従を認め、そしてこの服従をば、現に献身という言葉や古典文学に表わされる限りの総てのものに文字通りなそうとする運動であつた。しかし九〇号をめぐる出来事の後には変化が起つた。派は公的追放と刻印のもとにおかれる。不正に追放されたと考える派というものはますます自分を顕示しようとする。心は分裂し、感情は昂ぶる。と、当局の態度は一層固まり敵意にまでなる。……法王主義の脅し——根のないものではなく、また脅しに対する反作用も根拠のないものではない——は最も賢明な人達のバランスを失なわしめてしまふ。ましてや賢明でもない人は。熱狂した当時、ウインター博士、フォーセット博士、サイモンズ博士を神学において異端者、氣質において、迫害者、キリスト教的献身と自己否定の蔑視者であるとみないトラクタリアンはまずいない。学寮長の派の中で総てのトラクタリアンを、最も厳肅な約束を曖昧にし、過去を呼び返そうとする子供じみた迷信の無知な犠牲ではないと考へない者はいない。双方の側で激越さの時代であつた。生活の礼儀が忘れられ、譴責、嫌悪、反対の弱々しさを恐れ、古くからの友情は破れ、二、三年前までは愛し、賞賛した人達の極悪を信じた。⁽⁹⁵⁾

まさに敵意の時代であつた。それはまだ続く(四七年ハンブデン教授のヘリフォード主教就任問題等)。

オックスフォード運動が山を越え、各派各層の入り乱れての抗争が収まるようになるのと、より幅広い見方、自由主義的立場が浮び上つてくる。チャドウィックによればこうである。⁽⁹⁶⁾

二〇〇年前宗教的抗争による疲弊はラティテューディナリアンな神学を生んだ。今や同じ疲弊は自由主義者を利した。トラクト主義をめぐる争いがどんな結末をもたらしたとしてもそれはオックスフォード大学の旧態を明らかにし、改革への自由主義者の要求を強化した。

「オリオール⁽⁹⁷⁾のホーキンスズに対する攻撃が失敗して後」自由主義神学、また自由主義的な大学改革の綱領はゆつくりとだがオックスフォー

ドではつきりとしてきた。ウォードやニューマンに従わなかったが以前捧身的であつたトラクタリアン——M・パタソンやJ・A・フルード「上記フルードの弟」のような人達——はためらいがちにだが、自由主義へと改宗した。……ピュセイは地方の牧師の中ではなお知られる名であつたが、オックスフォードでは彼の学派は衰退し、滅亡へとひきずられていった。

四〇年代半ば以後大学の雰囲気はかなり変わる。コックスは有名な文章で、ドン達が神学論争からいかに鉄道株に情熱を移したかを語っている。⁽⁹⁷⁾ニューマンがオックスフォードを去つたと同じ頃(四二年)アーノルドがオックスフォードの教授になつたことは象徴的である。「トラクト主義の崩壊はオックスフォード自由主義者に新たな名声を与える」⁽⁹⁸⁾。スタッフスによれば、常識ある人間は「一、宗教心にとんだ人達、二、古典派の人達、三、無信仰の人達」であり、最後の人達は「ラグビー」と「ウォダム」に分けられるという。「ラグビー」と「ウォダム」はオックスフォード自由主義の二大要素であつた。⁽⁹⁹⁾アーノルドはオックスフォード自由主義者の大集団の父であつた。彼は四二年死去するが、直接間接の有能な弟子⁽¹⁰⁰⁾後継者を数多く残すのである。弟子達は師よりも一層自由主義的となる。とはいえ、オックスフォードで自由主義者が勝利したわけではない。オックスフォード運動は衰退したが、保守的傾向は依然続く。高教会派の勢力は著しい(トラクト主義も消滅したわけではない)。大学外でも、国教会内部でさえも、政治的抗争とからんで激しい対立がある。ハンブデン教授の主教任命や、ゴラムの牧師任命をめぐる主教との対立と枢密院司法委員会の裁決問題⁽¹⁰¹⁾(四九一五年)などは典型的なものである。

そもそも国教会や旧大学でのウィッグは多くはなかつた。有力な人物としてはウェトリ、アーノルド、ミルマンである。ホーキンス博士(学寮長)、ウェトリ、アーノルドはオックスフォード大学オリオール・コレッジのトリオとしてトリーの槍玉にあがつた三人であつた。ホーキンスは鈍い人間として軽くみられ、彼らのほこ先は主にウェトリに向けられた。ウェトリ(一七七八—一八六三)は、オックスフォードで論理学の研究を復活させた人物として著名

である。⁽¹⁰²⁾深いというよりは器用といった方がよかったが、大学では気むずかしい人間として通っていた。体が大きくマナーが粗野で、学寮での大食いであり、通常の仕きたりを全く無視し、一見僧侶にはみえなかつた（大学での渾名は白熊であつた）。会話は戦鬪的で、考えは論議で練つた。カトリック解放問題、アイルランド問題、国教会問題で、ドラステイックな改革が必要という立場であり、ウィッグ側の最も鋭い僧侶的信条の人物として通つていた。三〇年あるジャーナリストはアーノルドをウエトリリーの \langle 介添人 \rangle といっている。ジョン・ブル紙によれば、ウエトリリーはオリオール・グループの頭であり、自分以外の総ての人間をばかと思つている人物であるといふ。⁽¹⁰³⁾二五年セント・オーバン・ホールの学寮長となり、二九年にはN・シニオアの後を継いで経済学教授となつた。三二年グレイ首相は彼をダブリンの大主教に任じ、メルボーン内閣の時には、彼は首相のアドバイザーとなつた。彼に比べると、アーノルドは「より謙虚であり、より歴史的であり、より尊敬心があつた」。

ウエトリリーは解剖学者のように宗教の真理を分解するが、アーノルドは畏怖の気持をもち、かつそれを伝える。しかし政治思想においてはではない。オックスフォードを去つて後教師となり、著述には教訓のトーンを付する。忠言や批判には謙虚に耳を傾けるが、さればといつて自分の考えを変えようとはしない。少年たちの面倒をみるのに忙がしく、ウエトリリー以上にさえ世間から離れ、隔つた所におり、世事に疎いが、世俗の人間を惹きつける問題については堂々と発言することを厭わない。論理的熱情がすぐに発露し、ヒューマーがウエトリリーよりもずっと少なく、こうした発言を熱を帯びた激しい道徳的情熱をもつて発する。説教壇上では効果はノーブルである。ウエトリリーは後世の人々がのこしたいと考えるような説教を残さなかつたが、アーノルドは世紀中最も立派な説教を多く残した。学識への愛と精神の広さとは、キリスト教信仰と行為をば学校と国民の中に高く掲げさせる論理的エネルギーと稀にみるほどの調和をもつて人を動かした。しかし政治においては、世俗のものにせよ教会のものにせよ、一面性、熱情、エネルギーが支配し、アーノルドは導きとはならなかつた。⁽¹⁰⁴⁾

ミルマン(一七九一—一八六八)はオックスフォードのブレズノーズ・コレッジの出身であり、詩学教授(二二—三一年)であった。のちウエストミンスター寺院の参事会議員に(三五年)、四九年にはロンドンのセント・ポールの副主教となった。⁽¹⁰⁶⁾

オックスフォード自由主義はラグビー校卒業生から多大の影響をうける。アーノルド自身その旗印であった。彼らは友人関係を通じてそのインフレンスを広げる。実際彼らは「オックスフォードでは大きな自由主義者の一群の一部をなすにすぎない」⁽¹⁰⁶⁾。オックスフォードの改革に積極的な役割を果たすペリオールのB・ジョウエット(一七—九三年)はスタンレイの親友であり、共に仕事をした。若い頃既に正式受諾の制度に反対するようになっていたが、スタンレイと共にドイツ旅行をした(四四、四五年)後は、熱烈なヘーゲル主義者となった。⁽¹⁰⁷⁾「オックスフォードの中で、一八四八年の革命に登場するドイツの自由主義的教授に最も近い存在であった」。彼が用いるテキストといえば、プラトンの『国家論』とペーコンの『ノヴァム・オルガノン』であった。クリスチャンとしては「意図という点でのみ」そうである以外ではなくなる。⁽¹⁰⁸⁾ 大学改革でも重要な役割を果たす。オックスフォード自由主義の導きの星であったアーノルドの亡き後、残った人達の結びつきを強化したのは彼であった。彼の拠点は大学内のイスタブリッシュメントではなく、国王により任命される教授陣にあった。彼が大学改革の足場として築いた学寮はペリオールであり、この学寮が大学の自由主義的改革の先頭を切る。五四年、まさに大学改革の真最中においては彼はその学寮長には選出されなかったが、この頃までにはペリオールの半分以上のフェロウは彼の弟子となっていた。⁽¹⁰⁹⁾ (彼が学寮長になったのは七〇年。弟子グリーン—ラグビー、ペリオールが特に行政面で彼を支える)。ジョウエットの外に、ヒューズ、ヴォーン、A・G・バトラ、息子のアーノルド、A・V・ダイシー(三五—一九二二)など数多くの有名な人物はラグビー校に直接間接に密接に結ばれ、またジョウエットの友人たち、ゴールトウイン・スミス(二三—一九一〇年、オリオール、のち近代史欽定講座

教授)、バデン・ポウエル(幾何学教授)、フランシス・ジューン(ペンブルック学寮長)、リドン(二九一九〇。クライスト・チャーチ)などは、自由主義的な改革において大学で積極的な役割を果たした。

こうしてラグビー校は旧大学、特にペリオールの中にその影響を広げる。そして五〇年代後期ペリオールの人達による他学寮への△植民▽が急速に進み、それとともに自由主義的な影響範囲が広がってゆく。こうして支配層内の自由主義の潮流が形成されてゆく。「ヴイクトリア朝のペリオールの伝統はイギリスのアカデミックな制度の歴史にユニークともいべきインパクトを与える」⁽¹⁰⁾のである。世紀後半の自由主義的政治家・議員にはペリオールに直接間接に関係した者がかなりいる。

四〇年代オックスフォードでオックスフォード運動は衰退し、自由主義勢力は確かに伸びたが、それは勝利ではなかった。事実大学改革もちちとして進まなかった。こうして四六年政権をとり戻したウイッグのラッセル首相は、大学の内部から改革が容易に進まないのを見て、議会内に改革検討委員会を作ろうとする。大学の評議員会はこれをも濫った。オックスフォード選出の議員となっていたピール派のグラトストンも「地方制度における独立の地方的原理」を主張し、委員会設置に反対するが、議会は採決でこれをおし切る。評議会が委員の推せんをも濫ったため、ラッセルはオックスフォード自由主義の際立ったチームを編成してしまう⁽¹¹⁾(五〇年)。ウエトリリーの古くからの友ノリッジ主教ヒンズを頭とし、テイト、ジューン、J・L・ダンピア、B・ポウエル、H・G・リデル、G・H・ジョンストンが委員となり、これにスタンレーが書記役、G・スミスが副書記役として加わった。報告書が出されたのは五二年夏である。代表制をとりいれ、学寮長会の編成がえ、学寮制と個人指導制を維持しつつ、教授・講義制を——試験制の再編⁽¹²⁾とともに——強化する案であった。正式受諾は委員会の検討事項ではなかった。報告内容の実行はさし当り大学側の問題であったが、改革の進め方について政府の役割を積極的に考えるようになったグラドストン(アバディーン内閣の蔵相)⁽¹³⁾は、ジョウ

エット達とともに、⁽¹¹⁷⁾いくつかの立場を加味した妥協的なオックスフォード大学改革法案を練った。その骨子は次の通りである。⁽¹¹⁸⁾(一)学寮長会をより民主的に改組し、学生を除く広範囲の大学関係者で組織する会議体 Congregation をおき、それが選挙母体となつて選ぶ評議会^{カウンスル}とする。(二)宣誓は廃止はされないが、制限され、また副学長の認可のもとに私的な宿泊施設^{ホステル}をおきうることにする。(三)フェロウシップの半分は公募とする。(四)フェロウシップの四分の一まで僧侶職につかない俗人に割当て、コレッジに住まない者には制限を設ける。(五)フェロウはコレッジに居住するだけでなく、チューター、役職者、近辺の牧師、研究者としての証明をもつ者などでなければならぬ。(六)コレッジ収入の最大限五分の一は教授職の資金に当て、またフェロウシップの数などを減らし、年二五〇ポンドまでフェロウの収入をあげ、新建築をなし、ホールをつくること⁽¹¹⁹⁾ができる。この法案は五三年三月外相ラッセルによつて議会上程され、たいへんな迂余曲折を経ながら、⁽¹¹⁹⁾五四年その骨子においては殆ど修正されることなく可決された。法案作成に当りグラドストーンが力説したのは、コレッジのフェロウの一部を僧職就任の義務から切り離し、新しい研究に従事する限り開かれたものにしよとすることであり、そうした⁽¹²⁰⁾世俗的フェロウ^Wを四分の一まで増やしてよいとすることであつた。自由主義者はそれでも僧職に偏りすぎると強硬に反対した。⁽¹²¹⁾旧大学のフェロウが僧職と切り離されるのは世紀半ばすぎであり、学生の個人指導はそれまでは僧職に就くことになつて⁽¹²²⁾いるフェロウ達が行つたのである。

ケンブリッジでは、五六年法により、神学以外での学位取得には宗教テストは廃止される。ただ、大学行政には、国教会の者と違い、ノンコンフォミストの M A (文学修士) は加われない。

五四年と五六年の立法により、旧二大学の教育と学位にはどの宗派の者にも開かれるようになった。ただ大学と学寮の行政は国教徒でなければならなかつた。奨学金も競争的なものとなつた。大学のカリキュラムも新しい傾向をうけられるようになった。それは大学の外で発展していた新しい学問領域をうけられることであつた。オックスフォード哲学

は、以前ひき離されていた知的潮流に追いつく。サー・W・ハミルトンの哲学は学部で流行し、アリストテレスの研究はドイツの言語学と接触して科学的な土台をつくった。これらの変化は——五〇年に制定された試験法令の結果とあいまち——改革によって刺戟されたのである。⁽¹²²⁾

オックスフォードで改革は進んだものの、自由主義が勝利したわけではない。「五〇年代初めの激しい論争はオックスフォード内の力の均衡に驚くほど小さい変化しか惹起させなかった」⁽¹²³⁾。合理主義の滲透に反対して戦っていたビュゼイは孤軍奮闘であったが、それでも人々をひきつけていた。自由主義—改革派と保守派—高教会派との抗争は決着がつけられていない。大学のユニオンやコレッジのコモンルームの雰囲気はトーリー的であり、ブリリアントな若者はトーリーであり、高教会派であった。⁽¹²⁴⁾ 六〇年代半ばになると、改組された評議會^{カンセル}はじめ、大学の各層で、自由主義は勝利どころか、勢力を失墜した。⁽¹²⁵⁾ G・スミスさえ、六九年、若きオックスフォードが自由主義的であらねばならないという幻想を放棄してしまつたほどである。

オックスフォード自由主義者の希望は、オックスフォードにおける戦いにはない。その通路は余りにも狭く、敵側がながい間圧的に強力で固めてきたし、今もそうである。希望はより広い場にある。国の立法院を自由主義化せよ、そうすればこの立法院は時を浪費することなく、また慢性的な苦しみもなく一気にオックスフォードを自由主義的にするであらう。⁽¹²⁶⁾

六〇、七〇年代政治家や議員として活動する人達の中には、四〇年代半ば以後、旧大学、特にオックスフォードで学んだ人達が多い。二〇年代半ば以後に生まれた世代（パリ教授の新世代の中の後半の世代）である。彼らは大学教育を重視するようになったインテクチュアリズムの世代であつて、同時に、トラクタリアンの勢力が衰えて自由主義的な勢力が伸び、この勢力が依然として強固な保守派や高教会派と争つたオックスフォードの中で学んだ人達である。こうした抗争の中で彼らは——トラクト主義者によってさえも——政治的立場を鍛えられたのである。

アーノルドの宗教思想の流れは、オックスフォードの他の思想の流れと合流し、^{プロト・チャーチ}「**広教会派**」といわれる人々の教
 会理論をつくる。⁽¹²⁷⁾それは、⁽¹²⁸⁾

一八六〇年代までに、国教会や学校や大学や新聞や政治に流れ込む強烈なラティテユデイナリアニズムの洪水をつくりあげたように思わ
 れる。広教会僧侶の大部分及びウィッグー自由主義者の俗人で一八三五年から一八五五年まで大学に在った者は、アーノルド及び彼の弟
 子たちのうちの誰かから影響をうけた。

自由主義的国教会派の教会論は多くは、僧職にある者によってでなく、アーノルドのように、知識人―教師によって
 発展せしめられ、**「広教会」**の理論となった。それは一八世紀ウィッグのとつてきた低教会派の理論の流れをひき、高
 教会派の僧侶によって**「国家至上主義的」**といつて非難されたものであったが、⁽¹²⁹⁾**「広教会派」**は一九世紀の様々の影響
 をうけながら、それを思想的により深めたということができよう。三〇年代以後国教会の改革を進める重要な発条とな
 ったのは彼らであり、その源流がアーノルドたち、またさらにコールリッジたちであった。一九世紀半ば以後、このグ
 ループの戦士となつたのが博士の弟子であり、その伝記作者であつたA・スタンレイ(ウエストミンスター寺院の副主
 教となる)であつたこともこのことを示そう(**「広教会派」**という言葉ができたのは四〇年代であつたといふ⁽¹³⁰⁾)。彼ら
 は自由主義的神学を信条とし、僧侶より学者に多く、教会内部でよりはその外で大きな影響力をもつ。人数は多くない。
 彼らは教会の行財政の改革において自由主義の側に立ち、ウィッグを支持した。この点で彼らは高教会派や福音主義者
 と異なるし、オックスフォード運動やニューマン達とは鋭く対立した。アーノルドの『教会改革原理』は、高教会派の
 行き方に対立し、広教会派の信条の基本を示したものであり、⁽¹³¹⁾デイセンターを国教会内に包攝しようとしたが、スタン
 レイもこの線に沿つて議論を展開する。彼は『非国教化とは何ぞや』という論説(七一年)の中でこ⁽¹³²⁾ういふ。

一、許容しうる教義の領域を広げること。

二、儀式や礼拝形式の中で不人気なものを除くこと。

三、教会行政・組織において僧侶の発言力を縮減すること。

息子のアーノルドやスタンレーは、これら三つの事がらにおいて、宗教的慣行を国民生活の知的精神的な潮流と調和させるのが国家の役割であるという。⁽¹³³⁾二人は国教会の祈禱書と教会規律さえ保持させさえすれば、ノンコンフォーミストを、彼ら自身の条件で国教会の中にうけいれてよいとした。⁽¹³⁴⁾ただ、アーノルドの方は彼らの偏狭さにより厳しい。

われわれは既にビュリタニズムがこそどろ式の組織をもつために偏狭に陥ったことをみた。それでビュリタニズムを国民生活の主流に接しめることによってそれを匡正しようとした。⁽¹³⁵⁾

中産階級ノンコンフォーミストの宗教・道徳主義的偏狭さに、ギリシア主義的優美と慧知を滲透させることによって、人間性の完成（教養）へと近づけようとするのである。そしてこれは国家の役割を示唆するのである。

教養は国家の観念を示唆する。われわれは日常の自己の中には強固な国家権力の基礎を見出さない。他面、教養は我々の最善の自己の中にそれがあると示唆する。⁽¹³⁶⁾

「全社会、即ち国家の観念にまで向上し、そこに我々の慧知と権威の中心を見出す」べきなのである。国教会とはそうした慧知と権威を含む存在であり、ここにノンコンフォーミストをひきいれようというのである。

広教派会の考えには福音主義者（主に低教派）も賛同する。⁽¹³⁷⁾「キリストにおいて」堅固なプロテスタントの統合に達するためには外的特権を喜んで犠牲にしようというのである。僧侶の印や過剰な儀式を嫌う彼らにはこのことはたやすいことであつたらう。他方、高教会の人たちは広教派に真向から対立する。彼らにとって教義と礼拝（形式）は本質的なものである。

確定された教義をもたないか、殆ど全くもない宗教、何としても教えられ、そのために悩まれねばならない絶対的真理の定めがなく、内面に厳しく迫る戒めであるが、にも拘らず罪人にとつてこよなく暖かい慰めとなる言葉のない宗教は全く宗教とはいえない。(H・P・リドン)⁽¹³⁸⁾

高教会派の人達にとつて定つた教義とその教義の遵守とは宗教にとつて不可欠のものであつた。また彼らは——最も論争的となる——聖さんにおけるキリストの現在の觀念を護持し、悔い改めた人がキリストのからだの中にうけ容れられる儀式（サクラメント）の役割に特別の効力を与える。この儀式の受容は、共同（体）的行動とみられる時、最も心をひきたてるものとみられる。キリストの中に集まることによつて「一つの聖なる真理の統合」⁽¹³⁹⁾となるからである。こうした教義と礼拝に裏づけられた国教会觀は△国家至上主義的▽広教会派の立場と際立つて対立する。

ウィッグの大勢はこのような広教会主義をうけいれた。それは国教会をそのようなものとして堅持し、そのためにも国教会をその方向へと改革してゆこうとする。国家は国民の生活をあずかるものであり、その知的精神的变化に適合するよう、教会の在り方を変えてゆくべきなのである。ウィッグは国家権力を通じてでも教会問題に関与してゆくことをためらわない。国教会が△腐敗▽し、僧侶が余りにも教会の物質的側面に関心をもちすぎると思われたとき、ウィッグは三〇年代国教会の改革を進めた。ウィッグはデイセンターと共通の主張を多くもち、また現に彼らのために動いたが、国教会の改革を実行したとはいえ、国教会の堅持ということでは、彼らの主張とは質的に異なる。余りにも教会と国家を結びつけることに反対であるとはいえ、彼らは非国教化には反対なのだ。少なくともイングランドではそうである（スコットランドについては多数派の長老派の国教会を認め、教徒が住民の小数派であつたアイルランドについては少数派の国教会の非国教化を認めるようになる）。大部分のウィッグは国教会制が国民全体の精神的側面において有用なはたらきをなしているし、また国の社会的安定の確保という實際的な有用性については、誰一人認めない者はなか

つたといつてよい。ウィッグは、教会の精神的側面を力説しつつ、その教義的、組織的排他性をできる限り緩和しようとした。即ち、伝統的な教義や礼拝形式に疑問をなげ、それらが、理性的な信者であればいつかは一致してうけ容れるようになるキリスト教の基本的な真理を蔽いかくしてしているとした。この基本的な真理さえ堅持していれば、他の事がらは多様で緩いものにしてもさしつかえなく、そのことよつてまた、国教会とノンコンフォーマリストとの間の障壁が除去され、彼らも国教会に入りうるであらうし、少なくとも同胞の意識で国教徒とともに動くようになるであらう。これが広教会派の議論であり、ウィッグの国教会観であつた。その骨格は、本質的な信仰箇条の一致さえあれば、他の事がらに多様性があつても国教会に入りえ、このことよつて国の精神的支柱と一体感が確されるということにある。したがつて無意味な \wedge 儀式主義 \vee にこだわつて、排他的になりなちな高教会主義に反発する。外面的儀式などは多くは宗教に本質的なことではなく、国教会はそれに固執することはないといふのである。ノンコンフォーマリストと同様、ウィッグは、三九ヶ条の信仰箇条の受容のルールや画一令の適用を緩和すべきであると考えてきた。

註

- (1) Dicey, *Law and Public Opinion in England* (1914), pp. 63-4.
- (2) J. S. Mill, to Charles Dupont-White, 10 Oct. 1865, *Works*, xv (1972), p. 745.
- (3) J.P. Parry, *Democracy and Religion*, (1986), p. 6.
- (4) トンデンエブライットからの引用。A. Briggs, *Victorian People* (1954), p. 51.
- (5) Smiles, S., *Self-Help, with Illustrations of Conduct and Perseverance* (1857), p. vi.
- (6) Christie, O.F., *The Transition from Aristocracy 1832-1867* (1927).
- (7) *Ibid.*, p. 231.

- (8) Seaman, L.C.B., *Life in Victorian London* (1973), 社本・三ツ星訳二三七八ページ。このテーヌの言葉について、著者はだいたい当たっているか、主に上品ぶった下層中産階級や暮し向きがよく世間体を気にする労働階級の一つの生活様式を表わしているにすぎないとしている。
- (9) 同一三七ページ。Margetson, S., *Victorian High Society* (1980), chap. 1.
- (10) Cranston, M., *Political Dialogues* (1968), 山本・中野・岡和田訳二七三―四二ページ。
- (11) *Gentlemen's Magazine* (1787); Clark, J.C.D., *English Society, 1688-1832* (1985), pp. 106-18.
- (12) Christie, *op. cit.*, p. 226.
- (13) 註10参照。
- (14) Christie, *op. cit.*
- (15) Smith, E.A., *Lord Grey*, (1990), pp. 12-3.
- (16) シーモン、同一四九―五〇ページ。
- (17) 同一五〇―五二ページ。
- (18) Christie, *op. cit.*, p. 231.
- (19) Margetson, *op. cit.*, pp. 90-1.
- (20) 本稿第二章参照。
- (21) 拙著『英国自由主義体制の形成』三六〇ページ以下。
- (22) 同第六章第四節参照。
- (23) ウィッグと広教会派は国家が教会に関与することを肯定し、トリーリーや高教会派はそれを否定する傾向がある。後者にとつて前者は \wedge 国家至上主義 \vee とつづる。
- (24) 伝統的に古典文学科、そのB・Aの試験、そのための学科目の履修が主流であり、法律家、医師養成のための専門教育は他の制度に委ねられることになった。専門職としては僧侶になるのが主流であった。
- (25) Parry, *op. cit.*, pp. 58-9.
- (26) *Ibid.*, p. 59.

- (27) *Ibid.* p. 57.
- (28) Forbes, D., *The Liberal Anglican idea of history* (1952); Brent, R., 'The emergence of Liberal Anglican politics: the Whigs and the Church 1830-1841' (1985); Parry, *op. cit.*, p. 17.
- (29) Parry, *op. cit.*, p. 79.
- (30) 〱ル『自伝』朱牟田夏雄訳一三三ページ。
- (31) 同一一三三四ページ。
- (32) 同一一三五ページ。
- (33) Plamenatz, J., *The English Utilitarianism* (1949), p. 51.
- (34) ブルリアムが大学の自治組織化のために議会で動こうとした(二二五年)が、オックスフォード選出議員のピール内相が反対に廻り、ブルリアムは断念した。ピールは、特権的地位を維持しようとする大学人の意向を察して反対に廻ったのである。Bellot, H.H., *University College, London, 1826-1926* (1929), pp. 216-7; *Quarterly Review* xxxix 133; Ward, W.R., *Victorian Oxford* (1965), pp. 64-5.
- (35) Sedgwick, A., *A Discourse on the studies of the University of Cambridge* (1850), p. 52.
- (36) トリニティ・コレッジは一八世紀末以来ケンブリッジの最大のコレッジであつたし、半世紀以上に亘り優秀な卒業生を送り出した。Robson, R., *Trinity College in the Age of Peel, Ideas and Institutions of Victorian Britain*, ed. by Robert Robson (1967), p. 321.
- (37) Alford, H., *Diary*, 19 Dec. 1830; Robson, *ibid.* pp. 326-7. C・ワースワースは高教派であるが、彼は、コレッジが国教会の教義を教え、メンバーがその慣行を守るようにさせられることにかかわる国教会の制度であることを否定した(A Letter to the Rev. T. Turton on the admission of Dissenters to Academical Degrees, 1834) ため、テュターの地位を解任した。Robson, *ibid.*, pp. 330-1; Chadwick, O., *The Victorian Church*, P. 1, 3rd ed. (1971), pp. 92-3.
- (38) F.D. Mannia, *The Life of F.D. Maurice*, vol. 1, p. 176, Robson, *ibid.*, p. 327.
- (39) 〱ル『自伝』第五章の「わが精神史の一危機」の部分参照。
- (40) J.S. Mill, Coleridge, (1840), *Westminster Review*, 塩尻公明訳『ケンサムとコールリッジ』八一ページ。

- (41) Parry, *op. cit.*, p. 68.
- (42) 拙著『英国自由主義体制の形成』一〇八―九ページ。
- (43) 出典不明。
- (44) Morley, J., *The Life of Gladstone*, vol. i, p. 28.
- (45) *Eminent Victorians, Mr. Lytton Strachey*, p. 187.
- (46) Young, G.M., *Victorian England: Portrait of an Age*, (1936), p. 70.
- (47) Arnold, T., *Miscellaneous Works* (1845), p. 349.
- (48) Stanley, A.P. *Life of Thomas Arnold* (1904), pp. 119-20, 406.
- (49) Arnold, M., *Culture and Anarchy* (1869), 多田英次訳一七四ページ。
- (50) 同二三〇―三ページ。ヘブライ主義とギリシヤ主義の相互渗透の必要性については特に同第五章参照。なお Alexander, E., *Mattew Arnold and John Stuart Mill* (1965), p. 97.
- (51) のち(一六四―一八一年)ウエストミントアの副主教になった。
- (52) Tiltson, G. and K., *Mid-Victorian Studies* (1965), p. 185.
- (53) 上掲拙著「第四」五、六章参照。
- (54) Chadwick, *op. cit.*, pp. 25-6.
- (55) *Ibid.*, pp. 29-30.
- (56) J. Wale. 功利主義的ジャーナリスト。『ブラック・ブック』は雑誌(二三二―三三年)であり、三二年一冊の本に収められ、*The Extraordinary Black Book*として公刊された。
- (57) 上掲拙著第六章四節参照。
- (58) 同二三六ページ参照。
- (59) Chadwick, *op. cit.* p. 61.
- (60) 選挙法改正の時、オックスフォード大学は三二年夏以後、改正により敵対的となった。やがて、改正が危険なものであり、かつ、「承認された憲法慣行に違ふ」ものであるとして、反対の請願を行う。University archives, M.S. Minutes of Heb-

- domadal Board, 1823-33 fos. 173-4 ; C. Wordsworth, *Annals of my early life* (1891), p.84; Ward, *op. cit.*, p. 78.
- (61) Hodgskin, T., *Travels in the North of Germany* (Edinburgh, 1820) ii, pp.265-9.
- (62) Bellott, *ibid.*, pp.216-7. オックスフォード選出議員のピールが反対のため積極的に動いた(一五年)。三一年にもロンドン大学は学位授与権を獲得しようとしたが、オックスフォードの反対によって潰された。Peel, *Memoirs*, ii, p.66. 三三年の国王特許獲得の動きはイギリスの反対にあつて潰れる。 *Parliamentary Debates*. 3s. xix.120 seq.
- (63) Sir Hamilton, W., *Edinburgh Review*, liii,384seq; liii,386,397-8, liv, 478seq; Veitch, memoir of Sir William Hamilton, p. 30; Ward, *op. cit.*, p.82-3.
- (64) J.S. Mill, *Dissertations and Discussions*, i, I seq.
- (65) B.M. Ald. MSS.44281 fo.6; Ward, *op. cit.*, p.91.
- (66) *Ibid.*
- (67) Melbourne to Butler, 28. feb.1836; Chadwick, *op. cit.*, p.122
- (68) Chadwick, *ibid.*, Part II (1972), p.441.
- (69) *Ibid.*
- (70) Ward, *op. cit.*, pp.74-5.
- (71) Foster, E.M., *Marianne Thornton* (1956), p-89; Ward, *op. cit.*, p.74.
- (72) 学寮中反動の温床であつたセント・ジョーンズがウエリントンを推した。 Ward, *op. cit.*, p. 84.
- (73) *Ibid.*
- (74) *Greville Memoirs*, iii, 46; Ward, *op. cit.*, p.86.
- (75) Ward, *op. cit.*, p.94.
- (76) Wellington to the Vic-chancellor, Aug.27, 1834; Ward, *ibid.*, pp.91,94.
- (77) 提案したのはニューカレッジの学寮長シャトルワースであつた。 B.M. Add. Mss. 40378 fo. 378; Ward, *ibid.*, pp.90-1.
- (78) テュター達は大学上層部よりより保守的であつた。

なおここで改革前のオックスフォード大学の統治機構をみておくと、一つは学寮長達の学寮長会議 Hebdomadal council で

あり、もう一つは評議会 Convocation である。前者は学寮長の集りであり、後者は、大学のシニア・メンバの集りである。大学の決定は評議会の投票によらねばならない。シニア・メンバは学寮に住む者でもそうでない者でもさしつかえない。鉄道が発達し、ロンドンに住む者も投票に加わるようになる。

(79) Arnold, *Principles of church reform*, (1833).

(80) サフォーク州ハドレーの牧師 H・J・ローズ (一七九五—一八三八) が三三年七月下旬フルードとパーマーを招いて討論し、フルードとパーマーはオックスフォードに帰って結果をニューマンとキーブルに話した。オックスフォードの四人は八月までに本論にあるような線を原則的にまとめたのである。

Chadwick, *op. cit.*, p. 71. オックスフォード運動の主役としては、よくキーブル (二七九二—一八六六)、ニューマン (一八〇一—九〇)、ピュゼイ (一八〇〇—八二)、ローズ, W・パーマー (一八一—一七八) がとりあげられるが、外に、H・フルード (一八〇三—三六)、イー・ウィリアム (一八〇二—六五)、C・マリオット (一八〇一—五八)、特にフルードが重要である。R.W. Church, *The Oxford Movement, Twelve years 1833-1845* (1819), p. 30, chap. III. ピュゼイ (一八〇〇—八二) が運動に加わるのは三三年末であり、彼は (ハッブル語) 教授であっただけに運動に重みを加えた。

(81) Chadwick, *ibid.*, p. 71.

(82) *Ibid.*, p. 175.

(83) *Ibid.*, p. 174. ニューマンもキーブルも『プロテスタント教会』という言葉を嫌い (それはドイツやスイスの教会のことだという)、彼らの中道の道はプロテスタントともカトリックとも同じではないという。ニューマンは宗教改革を改革しようとし、フルードはそれをなかつたものとみようとする。

(84) Chadwick, *ibid.*, p. 152. 旧大学には、神学教授のポストは欽定教授とレディ・マーガレット教授の二つがある。

(85) Ward, *op. cit.*, p. 102.

(86) Chadwick, *op. cit.*, p. 169.

(87) *Ibid.*

(88) J.F. Russel to a friend, 18 Nov. 1837; Chadwick, *op. cit.*, p. 169.

(89) しかし三七年末頃までには、学識者達はニューマン達と、伝統的な高教会主義とが異なることを気づき始める。

- (96) Butler, *Gladstone: Church, state, and tractarianism.*, Parry, *op. cit.*, p. 153.
- (97) Church, *op. cit.*, pp. 4-5, 6-7.
- (98) Greville, C.C.F., *The Greville Memoirs*, ed. L. Strachey and R. Fulford, iii, p. 267; vi, p. 9; Chadwick, *op. cit.*, pp. 113, 123.
- (99) 三九箇条にはプロテスタントとしかいえない条項があるのである。例えば、「教会は総て聖書から信仰をうる」とか、「偶像の前に跪く……のは非合法法である」とか、「化体についてローマ的とみられる見解にこの上なく憤るものである」とか、「パンとぶどう酒とは自然の物体にとどまるとか」「等々である。
- またニューマンは、信仰箇条が修正されるのは教会の手によつてのみであつて、議会にはそれができないともいう。
- (94) Chadwick, *op. cit.*, p. 204.
- (95) Church, *op. cit.*, pp. 257-8.
- (96) Chadwick, *op. cit.*, p. 211.
- (97) Cox, H. *Recollections*, p. 355; Ward, *op. cit.*, p. 128.
- (98) Ward, *ibid.*, p. 130.
- (99) *Letters of William Stubbs*, ed. W. H. Hutton (1904), p. 20; Ward, *ibid.*
- (100) Stanley, A.P., *Life of Thomas Arnold, headmaster of Rugby* (1904), pp. 305, 331, 402, 433-4; Parry, *op. cit.*, p. 68.
- (101) 福音主義者で、幼児洗礼典での無条件の再生を問題にするゴーラムを僧職につけるべきか否かが、所管の主教（フィリップス）とウイック政府との間で問題となり（四七年）、やがてこの異端問題は枢密院司法委員会に上訴されることになつた（四九一五〇年）。そこで教会問題が係争となるときは主教がくわえられることにはなつたが、宗教問題、なかでも教義の問題が世俗色の濃い枢密院で論ぜられ、決着がつけられてよいのかどうかということが問題となり対立点ともなつた。裁決は、ゴーラムが国教会の教義に反していない、という△包括主義的▽（広教會的）なものとなつた。Chadwick, *op. cit.*, pp. 250-71.
- (102) J. S. ミルはウエトリの『論理学綱要』*Elements of Logic*, 1826 についてウエストミンスター評論の中で書評している（ウエトリの『論理学綱要』一八二八）。ミルはこの本を批判的に高く評価している。矢島杜夫『ミル』『論理学体系』の形成』一九九三、四三二一六〇ページ参照。ウエトリは、オックスフォード運動を興したニューマンがオリオールの方

- エロウであった時、彼に論理的思考をたたきこんだ。Chadwick, *op. cit.*, p. 65.
- (103) Chadwick, *ibid.*, pp. 42-3.
- (104) *Ibid.*
- (105) Woodward, E.L., *The Age of Reform 1815-1870* (1949), p. 488.
- (106) *Correspondence of A.H.Clough*, i, p. 90; Ward, *op. cit.*, pp. 130-1.
- (107) Ward, *ibid.*, p. 131. 権威についての古い教義を捨て、新しい研究に、ベークンやロックやミルの領域、また哲学史に力を入れる。「スタンレイの伝統的なウィッグ主義ももたない」。
- (108) *Ibid.*, p. 213.
- (109) *ibid.*, p. 215.
- (110) Bowle, J., *Politics and opinion in the 19th century* (1954), p. 274.
- (111) グラドストーンは四七年総選挙で、オックスフォード大学から選ばれていた。
- (112) *Parliamentary debates*, 3S. cxii. 1455-525; Ward, *op. cit.*, p. 153.
- (113) Ward, *ibid.*
- (114) 試験制度の検討は五〇年に既になされていた。
- (115) だが、委員会は信条テストが大学の広がりへの妨げになるとしてそれを批判している。Report, pp. 54-6; Ward, *op. cit.*, p. 159.
- (116) B. M. Add. MSS. 44183 fo. 52; *ibid.* fo. 57; Ward, *op. cit.*, pp. 189-90. ラッセル (外相) は、グラドストーンが十分に「急進的」であるとして、彼に、報告の扱いを委ねた。Correspondence of A. H. Clough, ii, p. 373; Ward, *op. cit.*, p. 190.
- (117) Ward, *op. cit.*, p. 191.
- (118) *Ibid.*, p. 193.
- (119) オックスフォード内の高教会派と、スタンレイなどの改革派 (註120参照) の反対があり、かつクリミア戦争での混乱があつて、議会の審議が難行した。*Ibid.*, pp. 193-9.
- (120) B. M. Add. MSS. 44183 fos. 85, 93-4, 99-100; Ward, *ibid.*, p. 192.

- (121) B. M. Add. MSS. 44236 fo. 272 ; Word, *ibid.*, p. 193. スタンレイ、プロデイ、ヴォーン、ボウエル、J・M・ウイルソン、クロウ、コングリーヴなどである。
- (122) Ward, *ibid.*, p. 213.
- (123) *Ibid.*, p. 210.
- (124) Briggs, A, *Victorian People*, (1965).
- (125) 評議員会 Hebdomadal Conrcil, 五四年法で新設された教員会議 Congregation, 評議会 Convocation で勢力を失った。
- (126) Bodl. MS. Bryce 16 fo. 14 ; Ward, *op. cit.*, p. 235.
- (127) 五〇年代少数の自由主義的国教会僧侶が断続的に努力をなし、五三年までには神学の一派が広教派 Broad Church school として一般に呼ばれるようになった。一派は「アーノルドとコールリッジをみなおす」ものとみられた。Chadwick, *op. cit.*, pp. 544-5.
- (128) Parry, *op. cit.*, p. 68.
- (129) 拙著『英国自由主義体制の形成』七四ページ。
- (130) Chadwick, *op. cit.*, p. 544.
- (131) Conybear, Church Parties, *Edinburgh Review*, 1853, ii, p. 330; Chadwick, *op. cit.*, pp. 544-5.
- (132) Stanley, 'What is "disestablishment"?', *Contemporary Review*, xvii (May 1871), pp. 282-98.
- (133) Stanley, *ibid.*; Arnold, 'St. Paul and Protestantism', pp. 104, 118 ; 『教養と無株』
- (134) アーノルド、同三三三ページ。また Stanley, 'The Church and dissent', *E. R.* cxxxvii (Jan. 1873), P. 207; Hughes, T., *The old church, what shall we do with it ?* (1878), pp. 16-18 ; Fremantle, W. H., *Lay power in parishes ; the most needed Church reform*, 1869, p. 39 ; Parry, *op. cit.*, p. 99.
- (135) アーノルド、同三三三ページ。
- (136) 同、三三三ページ。なお、一五三二一八、一七六一一三ページ。
- (137) Hodder, E, *John Macgregor ('Rob Roy')* (1894), p. 99 ; Parry, *ibid.*
- (138) Liddon, H. P., *Some elements of religion* (1870), esp. pp. 20-6 ; Parry, *ibid.*, p. 151.

(139) Pusey, *The doctrine of the Real Presence* (1855), pp. 719, 721; Parry, *ibid.*

本稿は故荒木俊夫教授の追悼のために書きおろしたものである。

(「ウィックの衰退と終焉」第三節の一部にあたるものであったが、一応独立の形をとるよう書きかえた。)